

第十四回 新城薪能

とき 平成十五年八月二十三日(土)
午後六時始
ところ 新城文化会館大ホール
入場無料

能組

6時

仕舞

安宅
西王母
西王母
草紙洗小町

今泉尚美
松尾明海
中嶋 瞳
今泉友美

子供狂言
口真似

太郎冠者

佐野仁美

主 権田捺実
客 小林加奈

後見 畑中良雄

6時30分頃

火入式

新城市議会議長
新城市教育長

岡嶋威典
小林芳春

連吟 采女

金田夏代子

鈴木富代 加藤佳子
佐々木秀子 永田聡子
辻田育代 星野弘子
小林寿枝 竹下京子
荒川享子 今岡アイ子

ごあいさつ

新城市市長

山本芳央

連調 田村

辻田育代
金田夏代子
鈴木富代

荒川享子
竹下京子
加藤佳子

星野弘子
永田聡子
小今岡アイ子
小林芳枝

7時頃

狂言 墨

塗

大名 酒井 宏

女 天野 雅夫
後見 権田 重紘
太郎冠者 小澤 貞博

仕舞

船 弁 慶
玉 川 葛
桜 川 川
飛 段 川
網 之 鳥
天 鼓
山 姥

鈴木 富代
小林 寿枝
金田 夏代子
荒川 享子
辻 田 育代
加藤 佳子
竹下 京子

7時50分頃

狂言 附

子

太郎冠者 山本 勝
次郎冠者 山口 俊一

後見 権田 重紘

主人 佐野 泰三

8時15分頃

能 鉄

輪

シテ 今泉 英三

ワキ 竹内 三郎

大鼓 清水 利高

太鼓 中嶋 康夫

間 畑 中良雄

ワキツレ 竹内 省吾

小鼓 森田 收

笛 酒井 淑規

後見 粟谷 明生

鈴木 肇

地謡 加藤 貢
鈴木 崇史
鈴木 康弘

牧野 修

中村 邦生
粟谷 能夫
粟谷 浩之

附祝言

(終了予定九時十五分頃)

主催 新城市文化協会
後援 新城市

新城市教育委員会
新城市観光協会

あ ら す じ

狂言 口真似（くちまね）

主人に、もらい物のよい酒を一緒に楽しく飲んでくれる人を探してこいと命じられた太郎冠者（シテ）は、知り合いの男を連れてくる。しかしこの男は、酒癖がわるくて仲間外れにされている者なので、なぜ連れてきたのだと冠者を叱る。追い返そうとする冠者を主人はとどめ、男を座敷に通すように命じ、以後は自分の言うとうり、するとうりに振舞えと言いつける。おもしろくない冠者が主人の言うことをすべて真似して客に繰り返すので、話がだんだん混乱してしまい怒った主人が冠者を倒すと、冠者も男を同じようにしてしまふ……

狂言 墨 塗（すみぬり）

訴訟をすませて帰国することになった大名（シテ）が在京中になじんだ女のもとに別れを告げにゆく。女は別れを惜しんで泣く。実は、茶碗の水で目をぬらし、泣くふりをしているのを見つけた太郎冠者は、水を墨と取り替えてしまいます。女の顔が真つ黒になったのを見て、大名も女の本心を知り、恥をかかせようと、形見だと言つて鏡を与えます。その鏡で墨のついた自分の顔を見て女は……

狂言 附 子（ぶす）

主人が外出するにあたって、太郎冠者と次郎冠者に、これは『附子』と言う猛毒であの方から吹く風に当たつてさえ倒れてしまうからきをつけるようにと、言いつけて、出かけてしまいます。初めはおびえながら『附子』の番をしていた二人も、怖いものみたさのあまり、扇で仰ぎながら蓋を開けて見ると、何とその正体は砂糖とわかり、皆、食べてしまいます。主人が帰つてくると、その言い訳は……

能 鉄 輪（かなわ）

都に住む一人の女が、自分を捨て、新しく妻を迎えた夫の不実を恨んで、洛北、貴船の社（現在の京都市左京区鞍馬貴船町、貴船神社）に日参し、祈願をかけています。今日も社前に進むと、待ち構えていた社人（アイ）が『頭に鉄輪（ごとく）をいただき、その三本の足に火をともし、顔に丹を塗り、赤衣着物をきて、怒る心をもてば、たちまち鬼となつて願いがかなう』と神託のあつたことを告げます。女は人ちがいだといいますが、そういう内にも顔色が変じ、つれない人に思い知らそうと走り去ります。（中入）一方、下京の男は、悪い夢見が打ち続くので、陰陽師、安部清明のもとを訪れ、事情を述べて占つてもらうと、女の恨みて今夜にも命が尽きるといわれ、急いで祈禱を願います。清明は、祭壇を調べ、男と新しい妻の人影を作つて置き、祈り始めます。すると、悪鬼となつた女の霊が現れ、夫の心変わり責め、後妻の髪をつかんで激しく打ちすえますが、守護する神々に追つ立てられ、神通力を失つて、心を残しながらも退散します。

この曲は、庶民の女性が、男の不実を恨み、相手の女ともども呪い殺そうとする生々しい怨念を、古くから日本にある民俗信仰の丑刻詣の呪詛をからませて描いた異色の作品です。

薪能（たきぎのう）

この名称は夜になって薪をたいて、それを照明がわりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して新年に御薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でありました。それに伴って行われる猿楽が「薪の猿楽」でありました。奈良の「薪能」は奈良時代に起こった行事で、興福寺の修二会に鎮守の社から東西金堂へ行法のために薪を積む儀式であり、その時翁式の聖者が薪を負うてまうことが芸能化しました。初めは寺に所属する呪師が司っていました。後、猿楽者が代行するようになりました。能楽が大成後は金春座が責任者となり、他の座も参勤していましたが、明治以降は中絶、戦後昭和二十一年復活、昭和二十五年京都薪能が平安神宮で催されて以来、各地で大衆野外能として流行するようになりました。

新城に於ては新城文化会館が完成したのを契機に、平成二年第一回新城薪能が新城市文化協会主催で催され大好評を得ました。富永神社の祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加出来ることとなり、正に「能の里」を目指して参りたいと存じます。現在全国で二〇〇カ所程薪能が催されていますが、職分の先生方の演能がおおく、新城薪能は素人による演能であることが特徴であって、今後永い伝統を持つ祭礼能と共に、薪能を新しい伝統として守り発展させて参りたいと存じて居ります。今後とも皆様方のご支援をお願い致します。

薪能の短歌・俳句を募集しております。あなたの作品を文化協会事務局へお寄せ下さい。

謡・仕舞・囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）・狂言のお稽古をなさりたい方はお気軽に文化協会事務局へお申し込み下さい。それぞれ向きにお世話を致します。